

いと言って貰ってきませんでした。本当に感激でした。今でも会ってお礼を言いたいと思います。使っていた満人の一人が引揚げるまで私たち三人の面倒を見てくれました。会えるものなら会ってお礼を言いたいです。

## 満州からの引揚げに泣く

北海道 小島 まつよ

小島俊雄（当時は独身）昭和十年八月、牡丹江市に住む叔父のすすめで樺太敷香町より渡満した。

その後、満州電業牡丹江発電所に勤めていた俊雄と昭和十六年に結婚し、女兒二人に恵まれて楽しい生活が続いた。

夫は昭和二十年七月、召集となりソ満国境近くの東寧の部隊に入隊、八月九日頃ソ連の参戦により、日本人は敵国の真中に投げ出されたのも同様、治安は悪化、ソ連軍は攻めてくる。我々は居住地林口村から牡丹江市方面に避難を始めた。

頼りにしていた鉄道は爆破されて寸断、やむなく三歳と一歳の子供を連れて夜行軍である。

空腹と疲れで泣く子供。班長から敵に気付かれる、と叱責される。

泣く子供を着類でくるんでみたり、本当に自分も子供と一緒にかくれ泣きをして、一夜を明かしたことでした。

河向は牡丹江なのに、血の出るような苦行です。途中、小休止がかかると、子供のおむつを洗い原野に乾かしておき、取り込みに行くと半分はなくなっており、世の中集団になると様々な人が入り交じっていて、油断をしておられないとつくづく、みじめさにただただ泣き寝入りより仕方なく、そんなことでやっと牡丹江に到着してみると、すでにソ連軍の侵入で治安が悪く、牡丹江より南西二里ぐらい元日本軍の飛行場海林にも兵舎もあり、ある程度の施設も残っている、との情報で休むこともできず、すぐ海林に向かってまた行軍。多少の貯えもあつたので、途中満人の農家で、トウキビのパンを買求める途中、ソ連の銃撃があるかも知れないとの情報。子供

は泣かせないようにとの達しで、おっかなびっくり、夕方近くに無事、海林に着く早々夕飯の支度。

子供達も空腹で、考えると家を出てから、トウキビのパンと水だけで、何日ぶりのあたたかいご飯。上の子の手をたたいて喜ぶ姿を見て嬉し涙が流れる。あとで考えると、この夕食がわざわざいしてから胃腸を悪くして十月一日、親の愛情も知らずに亡くなってしまった。

早々、親しくしていた者同志で供養し、兵舎の片隅に穴を掘って埋めた。この悲しみを誰に恨みを言うこともできず、あまりのショックと苦難の生活に、身も心も疲れ母乳も出なくなり、次女も栄養失調で衰弱し、息をしているだけ。混乱の最中、葉もなくなただ見守るだけ。長女の死から十日目の十月十一日、苦しみもだえて次女も続いて死亡。

本当に敗戦のあわれさや、くやしき、一緒に死んだ方がどれほど楽か。

でも、まだまだ内地に引揚げるまでの道のりは遠い。召集された夫のことを思い、生きていればきつと会えることを思いながら一人、子供を亡くしたことのお詫び

もあるし、そんなことを考えながらも、単独行動も出来ず、下の子を亡くして一週間後、避難者が入って来て収容所も満ばいになり、上部からの達しで、ハルビンに移動することになりました。

ハルビンまでの遠い道のり行動は共にせねばと、折角親しくなった人達と別れ十月十八日出発する。三日くらい歩いて、横道河子までくると、幸いにもハルビン方向に行く列車に乗ることが出来たが、今度は別な苦勞が出た。

汽車が停車しても、用便に降りることも出来ない、ソ連兵や暴民達が列車を取り囲み、貨車の戸を内側からしぼったり、歩くかわりに今度はこの方が心配であった。このような目に会いながらやっとのことでハルビンに。ここでは日本人学校の白梅小学校に収容所がありここに落ちつく。

下着等の洗濯、共同水道で、夫の叔父叔母達と会い、嬉し涙が出る。教員住宅にいる叔父叔母達と一緒に暮らすことになったが安心してはいられず、夜、男達は玄関近くで寝、女達は奥の方にと、侵入にそなえての暮し。

昼、男達は使役にかりたてられ、昼も夜も心配ばかり。

ハルビンの冬は寒く、だんだんと冬が間近になると一層心配の明け暮れ、食糧も男達の使役や、僅かな着物との交換。

月に何回か南下する人達もあるらしく、早く南下組になれないものか、それを望みにしての暮し。

後続の避難民が、ハルビンに到着するたびに肉親はと、迎えに出たが見当たらず、寒い冬も過ぎ、ようやくハルビンにも春が訪れる。

二十一年五月中旬、やっと南下組に組まれて列車に乗ることが出来た。

叔父叔母とは別れてもまた、会うことを望みつつ列車に乗って新京、奉天も過ぎ、終着地、撫順に着く。収容者は皆、駅で出迎えを受ける。

生きていて良かったと、お互いにただただ涙。

手を取り合って喜ぶ。

さすが撫順は暖かく、別れた叔父叔母達も早くこないかと、別れた人達の幸せを祈るばかり。撫順での生活は落ちついたが、二か月後内地送還のためコロ島に移動、

二十一年十月十日コロ島より博多港へ引揚。博多より故郷宮城県桃生郡河内町鹿又へ引揚げて、夫の復員を待つたのでした。

## 引揚者体験の記

北海道 吹田 シノブ

昭和十二年頃、招きによって東京の教員生活から大連満鉄に転職しました。

家族三人は大連の社宅に住むことになりました。昭和十七年頃北京へ単身赴任しました。

昭和十九年春に軍族として南方に行き私と娘は大連に残りました。そうして、昭和二十年の八月にあの終戦を知らされました。角の通りに面した我家で終戦後一週間もたった頃、大きな戦車が一列に山手の方へ次々と続いで行く。機関銃をかまえたソ連兵が、その間にちらりほらりと見えた。

女、子供は一步も外へ出ない方がよいだろう幾日もま